

『朝びらき丸 東の海へ』の内なる敵

—Non-Human Characters を中心に—

中嶋 千秋

日本大学大学院総合社会情報研究科

Struggles against the Enemies Within in *The Voyage of Dawn Treader*

NAKAJIMA Chiaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The Chronicles of Narnia (1950-1956), written by C.S. Lewis (1897-1963), have been very popular among children all over the world for more than 60 years. One of the major features of the series is the presence of Non-Human Characters. Especially their utterances reflect traditional values Lewis intended to convey to children. Non-human characters of *The Voyage of Dawn Treader* (1952), the fifth book of *The Chronicles of Narnia*, illustrates that the real enemies are themselves within. This article clarifies what those enemies are and how the characters cope with or do not cope with them.

1. はじめに

C.S.ルイス(Clive Staples Lewis, 1898-1963)は現在の北アイルランド・ベルファスト出身の作家、文学史家、キリスト教弁証家である¹。『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56)は彼の代表作のひとつであり唯一の児童向けファンタジー作品である。『ナルニア国年代記物語』は47言語に翻訳され²、現在もシリーズ映画が制作中であり³、出版後60年を経て今なお世界中の子ども達に愛されている。本邦でも1966年に瀬田貞二訳で岩波書店

より出版されて以来、現在まで版を重ねている⁴。

『ナルニア国年代記物語』は別世界物語である。具体的には20世紀初頭～中盤のイギリスに設定された現実世界と、〈ナルニア〉⁵と呼ばれる別世界とがパラレルワールドになっている。主に現実世界の少年少女たちが様々なきっかけでナルニア世界に入り込み、そして再び現実世界に戻ってくる〈行きて帰りし物語〉が基本となっている。ナルニア世界には多数のNon-Human Charactersが生息しており、彼らの存在が『ナルニア』を魅力的にしている理由のひとつだと筆者は考える。

では、Non-Human Charactersとはどのような生き物であろうか。まず、ナルニア世界の住人は4つのカテゴリーに分類できる。すなわち

- ・人間
- ・通常の動植物

¹ 山形和美「C.S.ルイス一人と作品」山形和美、竹野一雄編『C.S.ルイス『ナルニア国年代記』読本』、増補改訂版、国研出版、1985年

² GoodKnight, Glen H., *Narnia Translations* (Narnia Editions and Translations)

〈http://inklingsfocus.com/translation_index.html〉(2014年12月12日閲覧)

³ DAVID MAGEE TO WRITE THE FOURTH NARNIA FILM: THE CHRONICLES OF NARNIA: THE SILVER CHAIR FOR THE MARK GORDON COMPANY AND THE C.S. LEWIS COMPANY (The Chronicles of Narnia Official Website)

〈<https://www.narnia.com/uk/news-extras/narnia-news/>〉(2014年12月12日閲覧)

⁴ 本稿での『ナルニア国年代記物語』内の固有名詞の日本語表記は瀬田貞二訳に準ずるが、一部異なるものがある。

⁵ 本稿での〈ナルニア〉表記は、『ナルニア』は『ナルニア国年代記物語』を指し、この作品に登場する別世界を〈ナルニア世界〉、ナルニア世界にある国名を〈ナルニア国〉とする。

- ・ものいうけもの (Talking Beasts)
- ・神話・想像上の生き物 (魔女、フーン、バックス、ニンフ、ドワーフ、巨人など)

である。その内、人間以外の3種、〈通常の動植物〉、〈ものいうけもの〉、〈神話・想像上の生き物〉を Non-Human Characters (以下 NHC と記す) と定義する。

NHC は物語に大きく関わり、作品世界を豊かに、且つ唯一無二のものにしている。本稿ではルイスが NHC を通して内省の大切さを読者に伝えようと試みたかを考察する。

2. ルイスについて

2.1 ルイスの生い立ち

ルイスは、ヴィクトリア朝(1837-1901)末期に、ベルファストの事務弁護士の父と牧師の家に生まれ育った母の間に空想好きの次男として誕生した。ルイスは全寮制のパブリックスクールの生活に馴染めず個人教授の下での勉学の後、オクスフォード大学に進学、学位を取得する。第一次世界大戦に従軍後、オクスフォード大学モードリン・コレッジの연구원を経てケンブリッジ大学で教授に就任している⁶。

2.2 ルイスの葛藤

ルイスはキリスト教弁証家としても高名であった。彼は『キリスト教の精髓』(*Mere Christianity*, 1952)など多数の宗教著書を出版し、また第二次世界大戦中、ラジオでキリスト教に関する連続講演を行っている(1941-43)。『キリスト教の精髓』はそれらのラジオ講演を書籍化したものである。

その一方で、ルイスは生涯一貫してキリスト教徒であった訳ではない。彼の母親は聖公会系のアイルランド教会の牧師一家の出であり、ルイスもその環境の中で育った。しかし、10歳で愛する母を病で喪い、また宗教のルーティン化に疑問を抱き、更にはオカルト的なものに対する関心が強くなり⁷、15歳で棄教し無神論者となる。その後、トルキーン(J.R.R. Tolkien, 1892-1973)ら大学の友人たちとの議論や書

物を通じて考えを改め、1929年に有神論者に回帰したのち、1931年に英国国教会の信徒になった。その後は前述通り、キリスト教弁証家としての活動を熱心に行った。

さらに、ルイス55歳のときに離婚経験があるユダヤ人系アメリカ人女性ジョイ・デヴィッドマン・グレシャム(Joy Davidman Gresham, 1915-1960)と結婚したが、それは親友であったトルキーンたちをも遠ざける結果となってしまった。結局、結婚生活は彼女が病死したため3年間という短い期間で終わってしまったが、その喪失感と葛藤は *A Grief Observed* (1960)に描かれている。

このように、ルイス自身が幼年時代から困難な状況が起こったときに葛藤を繰り返している。彼自身の内面での闘いが、本稿で取り上げる『朝びらき丸 東の海へ』(*The Voyage of the Dawn Treader*, 1952)の NHC に反映されているのではないかと筆者は考える。

3. 『朝びらき丸 東の海へ』について

3.1 物語のプロット

『朝びらき丸 東の海へ』(以下 *VDT* と記す)は『ナルニア』シリーズの3作目として発表されたが、年代記全7作の時系列順では4番目にあたる物語である⁸。シリーズ1、2作目(出版順)でナルニア世界に行き、現実世界に戻った4人の兄弟姉妹のうち2人とその従弟が再びナルニア世界に戻り、冒険をする。

かつて疎開先の家の箆筒を通してナルニア世界に迷い込み、ナルニア国の王・女王として君臨していたペベンシー(Pevensie)4兄弟姉妹の内、下の2人・エドモンド(Edmund)とルーシィ(Lucy)が夏休みの間預けられた親戚の家で、部屋に飾られていた絵を通してナルニア世界に戻る。今回は嫌われ者の従弟のユースティス(Eustace)も一緒であった。

ナルニア世界では折しも前回ペベンシー兄弟姉妹たちが助けたカスピアン王(Caspian)が、遙かな東の

⁶ 山形、前掲書

⁷ C.S.ルイス、『喜びのおとずれ』早乙女忠他訳、筑摩書房、2005年

⁸ 使用テキスト: Lewis, C.S., *The Voyage of the Dawn Treader*, New York: HarperCollins (1994) 以下 *VDT* と記す。また、テキストの和訳は筆者が行った。

海を目指して航海をしているところであった。カスピアン王の目的は、暴君であった前王が追放したカスピアンの亡父の善き友人たち7名を捜索することであった。

航海中、彼らは様々な困難や不思議なできごとに出くわす。最初は不平不満ばかりを言って鼻つまみ者だったユースティスも、ある出来事をきっかけに素直な少年へと変わっていく。やがてすべての友人たちの行方が判明し、亡くなった者、その場に留まることを希望した者以外は全員カスピアンたちとともにナルニア国に帰還する。一方、カスピアン王と航海をともしていた〈ものいうネズミ〉のリーピチーフ(Reepicheep)は、子どもの頃からの夢である、東の海の果てのそのまたさらに果てにあると言われるナルニア世界の創造主・アスラン(Aslan)の国にひとりで行くことを希望する。その願いは叶えられ、3人の少年少女たちはアスランによって元の世界に戻される。

3.2 『朝びらき丸 東の海へ』の Non-Human Characters

3.2.1 ナルニア国の住人

VDTにおいて特徴的なのは、シリーズ中唯一ナルニア国が登場しない海洋冒険物語となっていることである。従って、登場する NHC もナルニア国の住民としては〈ものいうネズミ〉リーピチーフだけである。彼はネズミの騎士で、カスピアン王が乗る帆船・〈朝びらき丸〉の乗組員のひとりである。彼は体格の小ささと反比例するような志の高さを持ち、わがままなユースティスと反目しあっている。VDTに登場するリーピチーフ以外の NHC はすべてナルニア国出身ではない。

3.2.2 『朝びらき丸 東の空へ』に登場する主な Non-Human Characters

VDTに登場する主な NHC は以下の通りである。

- ・アスラン、ものいうライオン、ナルニア世界の創造主。
- ・リーピチーフ、ものいうネズミの族長、勇敢な騎士。
- ・コリアキン (Coriakin)、魔法使い。元は星びと⁹⁾。

⁹⁾ 星びととは、天上の星が地上に降りてきたときの姿。

〈のうなし族〉を監視・教育することをアスランに命ぜられている。

- ・のうなし、のうなしあんよ (duffers, dufflepuds) 固体名ではなく種族名。コリアキンの島に住むドワーフ族。元は通常のドワーフのような姿形だったが、コリアキンに一本足に変えられてしまっている。
- ・ラマンドゥ (Ramandu)、隠居の星びと。カスピアンたちに協力的。
- ・ラマンドゥの娘 (daughter of Ramandu)、のちにカスピアンと結婚する。
- ・竜 (dragon)、実はユースティス。ことばは理解できるが話せない。
- ・海の人々 (Merpeople)、タツノオトシゴに乗って狩りをしている。船員たちは彼らに魅入られるという言い伝えがある。

4. 『朝びらき丸 東の海へ』の敵

4.1 『朝びらき丸 東の海へ』の特徴

VDTのプロットの大きな特徴は、物語を通じた敵役が存在しないことである。カスピアン王たちは様々な冒険や敵に出くわすが、他の6巻のように物語に一貫して存在する悪役や敵はいない。

他の6巻の悪役・敵役について出版順に見てみると、『ライオンと魔女』(The Lion, the Witch and the Wardrobe, 1950)では白い魔女(White Witch)とその一派、『カスピアン王子のつのおぼえ』(Prince Caspian, 1951)ではナルニア国の篡奪王ミラーズ(Miraz)、『銀のいす』(The Silver Chair, 1952)では魔女である緑衣の貴婦人(Lady of the Green Kirtle)、『馬と少年』(The Horse and His Boy, 1953)ではカロールメン国(Calormen)のラバダシュ王子(Rabadash)、『魔術師のおい』(The Magician's Nephew, 1954)では魔女ジェイディス(Jadis) (のちの白い魔女)、そして『さいごの戦い』(The Last Battle, 1955)ではカロールメン国と毛猿のヨコシマ(Shift)、といったように明確であり、物語の最終章近くまで敵役であり続ける。

しかし、VDTには、物語の最初から最後までを通じて一貫した悪役・敵役は現れない。大蛇に襲われ

外見は人間同様であるが魔法など不思議な力を持つ。

たり嵐に遭ったりするなど、航海の途中途中で単発的に訪れる危機にそのたびに打ち勝つ物語展開となっている。

4.2 内なる敵

VDTには一貫した敵役・悪役はいないと前項で述べたが、ではいったい登場人物たちは何と闘っているのだろうか。それは彼ら自身の心の中にある〈内なる敵〉である。それは目に見えず、個人個人で異なるが、それに打ち勝つことによって自己の殻を破り精神的な成長を見ることになるのである。

4.3 ユースティス

4.3.1 ユースティスの内なる敵

ユースティスはペベンシー兄弟姉妹の従弟の少年である。進歩的な両親に育てられ、友達がひとりもおらず、ペベンシー4兄弟姉妹のことも嫌っている。ユースティスの姓は Scrubb で、良く似た言葉に scrub があるが、これは「ちっぽけな人[物]¹⁰」を意味する。ルイスは VDT の冒頭で “There was a boy called Eustace Clarence Scrubb, and he almost deserved it.” (VDT p. 3) 「ユースティス・クラレンス・スクラブという少年がいました。そして名は体をほぼあらわしていました」と書いている。すなわち、ユースティス（とその両親）がちっぽけだと暗示している。さらにその直後、“he was a puny little person who couldn't have stood up even to Lucy, let alone Edmund, in a fight” (VDT p. 4) 「彼はちっぽけな人間で、けんかではエドモンドどころかルーシィにさえ立ちむかうことができないのです」と、ここでも “puny” 「ちっぽけな; 取るに足りない; 虚弱な¹¹」と繰り返し表現している。ルーシィはペベンシー4兄弟姉妹の末娘で、ユースティスより1歳年長なだけである（エドモンドとは3歳差）¹²。また、ユースティスはエドモンドとルーシィを嫌ってはいるものの、彼らが自宅に滞在することについては、意地悪をしたり偉そうにふるまえるので内心は歓迎しているというように、まさにちっぽけで矮小な考えを持っている。

ペベンシー4兄弟姉妹によるナルニア国統治時代、〈正義王〉として名を馳せたエドモンドでさえユースティスを「あの史上最低にいやな奴¹³」と評している。

〈進歩的〉な両親や学校の影響もあり¹⁴、ユースティスは誤った合理主義者・現実主義者で想像力の欠片もなく¹⁵、当然エドモンドたちのナルニア国の話をばかばかしいと思っている。そのように傲慢で自己中心的なユースティスが、エドモンドたちとナルニア世界に入り込むことになりそれまでの価値観がすべて覆されることになる。

ユースティスたちは壁に飾った海と帆船の絵が実体化し、波に飲み込まれながらナルニア世界へと入り込む。彼らを助けたのが帆船〈朝びらき丸〉で航海中のカスピアン王であった。ユースティスは自分が居た20世紀中盤のイギリスと比較し、インフラ整備がなされていない中世ヨーロッパ的なナルニア世界のことごとくを非文明的だと否定する。そしてナルニア世界の住人を見下し、高圧的な態度を取り続ける。（ナルニア世界には存在しない）イギリス領事館に保護を求めようとするような権威主義的な側面も見られる。また、自分よりも劣った存在だと思っているエドモンドやルーシィが皆から「陛下」と呼ばれていることも面白くなく、自分が不当に低い扱いを受けているような被害妄想を抱く。さらに、〈朝びらき丸〉唯一の NHC であるリーピーチーフのことは、出会った当初から

“Ugh, take it away,” wailed Eustace. “I hate mice. And I never could bear performing animals. They're silly and vulgar and-and sentimental.” (VDT p. 16)

『うわー、あっちへやっつて』ユースティスはひめいをあげました。『ネズミなんて大嫌いだ。それに芸をする動物は我慢ならない。ばかばかしいし、低俗だし、それに、えーっと、感傷的じ

¹⁰ 『ルミナス英和辞典』、第2版、研究社、2005年

¹¹ 同上

¹² 「ナルニア国年代表」、山形和美、竹野一雄編『C.S. ルイス『ナルニア国年代記』読本』、増補改訂版、国研出版、1985年より算出

¹³ “that record stinker” (p. 5)

¹⁴ ルイスは当時の学校教育に否定的で、VDTでも4度にわたりユースティスが〈正しい本〉を読んでいないと揶揄している。

¹⁵ “he was far too stupid to make anything up himself” (p. 5)

やないか』

と、精一杯背伸びした大人の受け売りとも考えられる言葉を使い¹⁶、嫌悪感を隠さない。その後もリーピチープを芸の仕込まれたネズミとみなし、敵対する。当然ながらカスピアン王やリーピチープたちも、口だけ達者で敵愾心むき出しで、実際にはなんの役にも立たないユースティスを快く思っておらず、ただペベンシー兄妹の客人ということで失礼のないように扱っているだけである。

すなわち、ナルニア世界に入り込みながら、ナルニア世界の存在を信じようとしないうースティスはペベンシー兄妹やナルニア人たちの敵役と言える。

このように、ユースティスは誤った現実主義・合理主義、高慢、傲慢、権威主義、自己中心的、わがままといった〈敵〉を内面に抱えているが、本人はそれにはまったく気づいていないのである。

4.3.2 ユースティスの改心

〈朝びらき丸〉は航海の途中、あちらこちらの島々に立ち寄る。ある島で、ユースティスはひとり洞窟を発見し、中に入ってみる。そこには金銀財宝が溢れており、一頭の竜がまさに死を迎えていた。そこは竜の財宝の隠し場所であったのだ¹⁷。

竜が死んだことを確かめたユースティスは、そこで豪華な腕輪を発見して腕にはめ、ポケットに入るだけダイヤモンドを詰め込み、疲れて眠ってしまう。やがて彼は、片腕に激しい痛みを感じて目が覚める。彼は大きな竜、すなわち非人間に変身してしまったのだ。“Sleeping on a dragon's hoard with greedy, dragonish thoughts in his heart, he had become a dragon himself.” (VDT p. 91) 「竜のように欲ばりな心をもって竜の宝ものの上でねむったので、かれ自身が竜になってしまいました。」 ユースティスは自分が竜に変身してしまったことを認識した直後は、これで恐れるものはなくなったと安心する。しかし、すぐに気持ちは変化する。カスピアン王やエドモンドとこ

¹⁶ 「ナルニア国年代表」より算出すると、ユースティスの年齢設定は9歳である。

¹⁷ ギリシャ神話や北欧神話では、竜は財宝を守る役目を司る。T.アラン、『ヴィジュアル版 世界幻想動物百科』、上原ゆうこ訳、原書房、2013年 (p.168)

れで対等になったという思いをすぐに打ち消す。

But the moment he thought this he realized that he didn't want to (be even with Edmund and Caspian). He wanted to be friends. He wanted to get back among humans and talk and laugh and share things. He realized that he was a monster cut off from the whole human race. An appalling loneliness came over him. He began to see that the others had not really been fiends at all. He began to wonder if he himself had been such a nice person as he had always supposed. He longed for their voices. He would have been grateful for a kind word even from Reepicheep. (VDT p. 92)

しかし、そう思っただけで、かれはその思いを打ちけしました。かれは（エドモンドとカスピアンと）友人になりたいと思いました。人びとの輪の中にもどり、しゃべったり笑いあったり、いろんなことを分かちあいたいと思いました。かれは、自分が人間界から切りはなされた怪物だということに気づきました。恐ろしいまでのさみしさがわきあがってきました。ほかのみんなが、真に悪い人たちではないとわかりはじめたのです。ユースティスは、自分が自分で思うほど良い人間だったか、不安になりました。ユースティスはみんなの声を恋しく思いました。かれはきっと、リーピチープからのひとことでさえ、ありがたいと思ったことでしょう。

ユースティスは竜になって初めて自分のことを振り返り、それまでの態度を後悔し反省しはじめる。竜になったユースティスは人語を解するものの、言葉は発せず、カスピアンたちに自分の正体を理解してもらうのに苦勞する。しかし、ようやく竜＝ユースティスということを理解してもらえると、ユースティスはこれまでと違う変化を見せる。“It was, however, clear to everyone that Eustace's character had been rather improved by becoming a dragon.” (VDT p. 101) 「しかし、ユースティスの性格が、竜になったことでかなり良くなったことは、だれの目にも明らか

かでした」と、改善の兆しが見える。竜になるまでは非協力的だったのが、変身後は進んで食料調達(狩猟)や船の修理用木材採集を手伝うようになった。また、竜は生肉を食べるが、その姿を他の皆に見られるのを恥じた。自分が人間とかけ離れた存在であることを再認識させられるからだ。

また、寒いときは自分の身体で皆に暖を取らせたり、背中に乗せて空を飛ぶなどしているうちに、ユースティスの気持ちは変化していく。“The pleasure (quite new to him) of being liked and, still more, of liking other people, was what kept Eustace from despair. For it was very dreary being a dragon.” (VDT p. 102) 「他人から好かれたり、それ以上に、他人を好きになるよるこびは、ユースティスにとってほとんどはじめての体験で、そのことがユースティスを絶望からすくってくれるものでした。というのも、竜であるということは、それはわびしいものだったのです」と、ユースティスはようやく他者を受容する喜びを見出す。「好かれる」のではなく「好きになる」ことにより大きな喜びを感じるようになったユースティスは、自己中心的な考えという〈敵〉に徐々に打ち勝とうとしているのである。

やがて竜の島を離れる航海を再開することになる〈朝びらき丸〉だが、皆は竜であるユースティスの処遇に悩む。〈朝びらき丸〉の船体がユースティスには小さすぎるのだ。ユースティスは自分が邪魔者になり皆の迷惑をかけてしまっていることを嘆く。しかし6日後、ユースティスは元の少年の姿で皆の前に姿を現す。

前夜、アスランが竜のユースティスの前に現れ、大きな泉に自分の身体を浸すように促す。しかし、水に浸る前に、“But the lion told me I must undress first.” (VDT p. 107) 「でもライオンは、先に服をぬぐようにぼくにいったんだ」と、脱衣するように命令する。竜は服を身につけていないので、ユースティスは戸惑うが、脱皮のことだと気づき、自分の黒くデコボコした表皮を爪で剥がす。しかし、同じことを3度繰り返しても竜の表皮は元通りになってしまふ。そのとき、アスラン自らが竜の表皮を切り裂く。奥深くまで爪を立てられたので、ユースティスはこれまでに経験したことのない痛みを覚えるが、同時

に表皮が剥がれる喜びも感じる。そして綺麗に表皮を剥がされ、泉に浸かったユースティスは、自分が元の少年に戻ったことに気づき、アスランに新しい服を与えられる。

この一連の儀式的過程は、再生、そして洗礼を想起させる。その後、新しい服をアスランから着せられる下りは、小野がこのように述べている。

・・・ユースティスの黒いでこぼこした皮、すなわち罪にまみれた自我からの解放は、神の前に自己を放棄する時、神の助けによってなされることである。聖書にも「新しき人を着る」(「コロサイ書」3:10)「主イエス・キリストを着る」(「ロマ書」13:14)という表現があるが、ここで男の子にもどったユースティスが、アスランに「新しい服」を着せてもらうということは、新しい人格、霊的生命を与えられるということである。またアスランは彼を水の中にほうりこむが、これは罪の潔めと新生を意味する洗礼を象徴すると考えられる。¹⁸

このように、ユースティスは非人間に変身することで己の愚かさに気づき、アスランの力を借りながら内なる敵を克服することに成功する。但し、彼はいきなり非の打ち所のない良い子になったのではなく、その変化、効果は暫時的である。

It would be nice, and fairly nearly true, to say that “from that time forth Eustace was a different boy.” To be strictly accurate, he began to be a different boy. He had relapses. There were still many days when he could be very tiresome. But most of those I shall not notice. The cure had begun. (VDT p. 112)

「このあと、ユースティスはまったくちがう少年になりました」と書いたら、なんとすばらしいでしょう。そしてそれは、ほとんど正しいの

¹⁸ 小野兼子『『朝びらき丸 東の海へ』—アスランの国へ—』山形和美、竹野一雄編『C.S.ルイス『ナルニア国年代記』読本』、増補改訂版、国研出版、1985年、p. 152

です。きわめて正確にいうと、かれはちがう少年になりはじめました。ときどき、元にもどってしまうこともあったのです。うっとうしい少年に思ってしまうこともまだ何度もありました。しかし、わたしはそのことはほとんど気づきませんでした。ユースティスの悪いくせがなおりはじめたのです。

このように、内なる敵に完全に勝つことはなかなか容易ではなく、元の自分と新しい自分の間で行き来しつつ、思いやりを持ち皆と協力する心を持った少年へと少しずつ変貌していく。ユースティスは読者の少年少女たちにとって反面教師的存在なのである。自分の至らなさに気づき、反省し、それまでの自分を変えることは決して簡単ではない。それでも少しずつ自らを変え、成長していく。このユースティスの変貌は、むしろ読者にリアリティをもって受け入れられるのではないだろうか。

4.4 のうなし族

4.4.1 〈のうなし族〉の内なる敵

〈のうなし族〉は、魔法使いコリアキンの使用人として仕えるドワーフ族の一種である。本来はナルニア世界に生息する通常のドワーフ族同様二本足であったが、コリアキンに一本足の姿に変えられてしまった。そのような姿の自分たちを醜いと思い込んだ〈のうなし族〉は、族長の娘にコリアキンが持つ魔法の書に書かれた「姿が見えなくなる呪文」を唱えさせ、醜い自身やお互いの姿を消してしまう。しかし長年姿が見えない状態にいることに飽き、偶然たどり着いたカスピアン一行のうち、少女でなければ効き目が無いということでルーシィに今度は姿が見えるようになる呪文を唱えてくれるように懇願する。その呪文を唱えるにはコリアキンの館の二階に忍び込み、魔法の書を見なければならない。〈のうなし族〉は皆コリアキンを恐れており、誰もその役目を自分たちで果たそうとしなかったのである。

〈のうなし族〉の内なる敵は、その愚かさや自己否定意識である。彼らが一本足になったのは、あまりに愚かでコリアキンの怒りを買ったからである。

〈のうなし族〉はコリアキンに畑と庭の世話を任せられるが、まったくコリアキンの指示通りにできな

いどころか、指示通りにしようとしめない。庭に水をやるのに、庭のすぐ脇に小川が流れているにも関わらず山のでっぺんの泉に汲みに行った挙句半分こぼしたり、後片付けの手間を省こうと食事前に食器を洗ったり、湯搔いたじゃがいもを土に植えて調理しなくて済むようにしたりする。また彼らはのうなし族の族長を崇拜しており、彼の言葉には常に無条件で賛同し、褒め称える。即ち、族長のみが意見を提示し、周囲は迎合するばかりで自分の頭で考えていないのだ。〈のうなし〉(duffer)の、〈のうなし〉たる所以である。

4.4.2 〈のうなし族〉の顛末

ルーシィが呪文を唱えたおかげで、〈のうなし〉たちは再び姿が見えるようになったが、相変わらず愚かなままである。ルーシィたちにも、〈のうなし族〉の〈醜い〉姿があらわになる。胴体の中央から短く太い脚が生え、その先にあるのは巨大な足である。その一本足で大きく飛び跳ねながら移動する。眠るときは仰向けになり、脚を上げることで雨除けにも日除けにもなり便利ですらある。

〈のうなし族〉は自分たちの一本足の姿が我慢ならない程醜いと思い込んでいるが、滑稽ながらも愛らしく、ルーシィもコリアキンも非常に気に入っている。ルーシィは、今の一本足の姿が素敵だと〈のうなし〉たちに伝える。その言葉を〈のうなし〉たちは喜んで受け入れるが、族長がルーシィの言葉はあくまで“as how we looked very nice before we were uglified.”(VDT p.171) (傍点筆者) 「われわれが醜い姿に変えられてしまう前が、どんなに素敵だったか」と言っているのだ、と歪曲する。その族長の誤った解釈にも、〈のうなし〉たちは賛同する。それをルーシィが否定し、族長がさらに否定することを繰り返す。〈のうなし〉たちは、どちらの言葉にも賛同する。その様子は煽動者の言動に無条件で迎合する民衆を想起させる。

〈のうなし族〉は結局、自分たちの内なる敵(愚かさ)には気づかず、コリアキンやアスランでさえ彼らが賢くなるにはまだまだ長くかかると諦めている。しかし、ネズミのリーピーチーフから大きな足をカヌーのように使う方法を教えられ、すぐにすいす

いと水面を渡れるようになる。これにはかれらも大喜びし、また、新しく与えられた *Monopod* (一本足) という名称と、以前からの *Duffer* (のうなし) が混乱した末にできた *Dufflepud* (のうなしあんよ) をとても気に入る。このように、他者の助言を得ながらも自己を肯定できるようになったことは彼らにとっての大きな変化である。

4.5 コリアキンの〈内なる敵〉

隠居した星びとコリアキンは、〈のうなし族〉の監視をアスランより任されている。その役目を負った理由は過去の罪に対する罰である。罪を犯すということは、なんらかの〈内なる敵〉に勝てなかったのではないかと推察される。

コリアキンの犯した罪についての詳細は明らかになっていない。しかし、元星びと、そして現在は魔法使いと非常に強い力を持っているコリアキンですら〈内なる敵〉に勝てず罪を犯し、それに対して罰を受けていることは非常に大きな意味を持つといえる。コリアキンは〈のうなし族〉の愚かさに怒り、彼らを一本足に変えた。しかしその後コリアキンは〈のうなし族〉の愚かさに呆れつつ、彼らを愛するようになっている。それは恐らく彼の〈内なる敵〉の克服を暗示しているのではないだろうか。

4.6 リーピーチーフ

4.6.1 ルイスと騎士道精神

ルイスは、中世英文学の教授であり、騎士道について並々ならぬ熱意を持っている。‘*The Necessity of Chivalry*’ (1940)において、ルイスは騎士について、2つの資質が欠かせないと定義し、“He is not a compromise or happy mean between ferocity and meekness; he is fierce to the nth and meek to the nth.”¹⁹

「彼(騎士)は獰猛さと柔和さのどちらも妥協せず、中庸を得ようとしめない。彼はさまざまなものに対して獰猛で、同時にさまざまなものに対して柔和である」と述べている。すなわち、戦場においては激しく闘い、平時には優しい人間でなければならず、そのどちらかの性質しか持ちあわせていなければ役立たずであるとまで断言している。

¹⁹ Lewis, C.S. ‘*The Necessity of Chivalry*,’ 1940, in Hooper, W. (Ed.) *Present Concerns*, New York: Houghton Mifflin Harcourt, 1986, Kindle Ed.

また、ルイスは *Mere Christianity* (1952)において、人間の徳について、4つの根源的諸徳と3つの神学的諸徳の7つに分類している。ルイスによれば、*Cardinal virtues*、すなわち根源的諸徳とは、*Prudence*・*Temperance*・*Justice*・*Fortitude* (知恵・節制・正義・勇気)の4つである²⁰。このように、ルイスは騎士の性質、そして人間の徳に関して明確な基準を提示していると言える。

4.6.2 騎士の理想像・リーピーチーフ

リーピーチーフは前述の通り、ナルニア国のものいうネズミの族長である。身の丈2フィート(約61cm)ほど²¹、後ろ足で立ち、腰にはレイピアを下げている。彼は“the most valiant of all the Talking Beasts of Narnia” (*VDT* p. 15)「ナルニアのものいうけものの中で、もっとも勇敢」と評されており、一目を置かれている。第3巻『カスピアン王子のつるぶえ』では、〈第2次ベルーナの戦い〉にてネズミ族を率いて人間たちを相手に勇猛果敢に闘い、重傷を負う。ルーシィの持つ魔法薬で傷が癒えた後、王座についたカスピアンに騎士の称号を授けられる。今回、カスピアン王たちと共に〈朝びらき丸〉に乗船した理由は、幼いころに聞いた東の海の果てのさらにその果てにあるアスランの国に行くという夢を叶えるためである。

リーピーチーフはまさに前項で取り上げたルイスの挙げる騎士の資質と、4つの根源的諸徳を兼ね備えた、まさに理想像である。

騎士の獰猛さについて、前述の通りリーピーチーフは戦場で瀕死の怪我を負うほど勇猛に戦っている。今回の航海でも、敵と思しき相手が現れればいち早くひるむことなく戦闘の意思を示している。一方、柔和さに関しても、彼は心優しい一面を随所にかもし出している。

特に、ユースティスがドラゴンになったあと、孤独な彼を慰めるべく寄り添ったのは他でもない、反目関係にあったリーピーチーフだった。

²⁰ Lewis, C.S. *Mere Christianity*, Business and Leadership Publishing, 2014, Kindle Ed.、C.S.ルイス、『キリスト教の精髄』、柳生直行訳、新教出版社、2000年

²¹ アスランによって言葉を与えられたけものたちは、体格も通常より大きくされた。

On the evenings when he was not being used as a hot-water bottle he would slink away from the camp and lie curled up like a snake between the wood and the water. On such occasions, greatly to his surprise, Reepicheep was his most constant comforter. The noble Mouse would creep away from the merry circle at the camp fire and sit down by the dragon's head, well to the windward to be out of the way of his smoky breath. (VDT p.103)

ユースティスがみんなから湯たんぽがわりにされていない夜には、野营地からひっそりとはなれ、森と海のあいだで蛇のようにとぐろを巻いているのでした。そのようなときには、リーピチープがいつもかれをなぐさめてくれました。それはユースティスがまったく予想していませんでした。この気高いネズミは、たき火をかこむにぎやかな人の輪をそっとぬけ出し、竜の頭のそばにすわるのでした。もちろん、竜のけむたい息がかからないように、風上に。

その際、リーピチープはユースティスに挫折から立ち直った沢山の者たちの話をして聞かせた。リーピチープとの会話は、“...it was kindly meant and Eustace never forgot it” (VDT p. 103) 「それはリーピチープのやさしい気持ちから出たもので、ユースティスは一生わすれることはありませんでした」とその後のユースティスの改心や人格形成にも影響を与えていることがわかる。

一方、4つの根源的諸徳についても、リーピチープが備えていることは明らかである。まず、〈知恵〉については航海中たびたび彼がカスピアン王たちに助言をしており、人間たちもそれに従うことが多々ある。また、〈朝びらき丸〉が大きな海蛇に巻きつかれる危機に陥ったときも、人間の乗組員たちが必死に海蛇と闘う中、彼だけが唯一海蛇の身体を押し返すことを試みる。リーピチープの考えを察した人間たちが、今度は彼に代わって全員で海蛇を押し返

し、圧迫が緩まったところを全速で脱出する²²。

〈節制〉については、リーピチープは自分の立場を弁えていることが物語の中で示されている。嫌われ者だったユースティスが行方不明になった際、むしろ死んでいてくれた方がいいと発言したラインス副船長に対してこのように発言する。

“Master Rhince,” said Reepicheep, “you never spoke a word that became you less. The creature (Eustace) is no friend of mine but he is of the Queen's blood, and while he is one of our fellowship it concerns our honor to find him and to avenge him if he is dead.” (VDT pp.88-89)

「ラインス殿」リーピチープはいいました。「それ以上ご自身の名誉をきずつけるようなことはおっしゃるべきではない。あの生き物(ユースティス)はわたくしの友ではありませんが、女王陛下の血をひくお方です。ましてや、あやつがわれらの仲間のあいだは、あやつを探さなければ、もしくは屍で見つかるものなら仇を討たなければ、われら自身の名誉にかかわりましようぞ」

このように、例え嫌いな者に対しても、節度ある対応をしようとするし、また他者に対しても同様に自制心を持った行動をすることを呼びかけている。

また、正義については、前述の引用をはじめ数多くの言動を示している。彼はまた強い信念を持ち、その信念を曲げることを是とせず、それは相手がナルニア世界の創造主アスランに対しても同様である。〈第2次ベルーナの戦い〉で重傷を負い、ルーシイの魔法薬で傷は癒えたものの尻尾を切り落とされてしまったリーピチープは、アスランに元に戻すよう頼む。アスランはまったく意に介さないが、なおもリーピチープは、尻尾がネズミの尊厳だと主張する。小さな身体の自分たちは、せめて尊厳を守らねば生きていられないと必死に懇願する。そして仲間のネズミたちが皆剣を抜き、もし族長のリーピチープの

²² VDT, pp. 118-120

尻尾が元に戻らないのであれば、その辱めを全員で共有しようと自分たちの尻尾を切る構えを見せた。さすがのアスランも根負けし、リーピチープの尻尾を元通りの長さに戻す。

“Ah!” roared Aslan “You have conquered me. You have great hearts. Not for the sake of your dignity, Reepicheep, but for the love that is between you and your people, and still more for the kindness your people showed me long ago when you ate away the cords that bound me on the Stone Table (and it was then, though you have long forgotten it, that you began to be Talking Mice), you shall have your tail again.”²³

「ああ！」アスランはほえました。「わたしの負けだよ。おまえたちはなんと広い心を持っているのだ。リーピチープよ、おまえさんの尊厳のためではない、おまえさんと部下たちのあいだの絆、そしてさらにはその昔、おまえさんたちの先祖がわたしを石舞台にしばりつけていた縄をかじりほどいてくれたやさしさ（忘れているだろうが、ものいうネズミになったのはそのときからだ）、それに免じよう。しっぽを元にもどそう」

このように、アスランが認めるほど信念を貫き通し、さらにはネズミ族の絶大なる信頼と敬愛を得ている。また、リーピチープたちの正義の心は、出版順第1巻『ライオンと魔女』で白い魔女に囚われたアスランを救助したのが彼らの先祖であることから、代々ネズミ族に伝わっているものだということが明らかである。

4つの根源的諸徳の最後、〈勇氣〉についてはこれまでの例でもリーピチープに備わっていることは明確である。危機が迫れば、例えそれがどんなに巨大な相手であっても真っ先に立ち向かおうとするのはリーピチープであるし、敵だけではなく味方です

ら誤った道を選ぼうとすれば直ちに反論する。仲間を助けることは当然だが、単独で行動する勇氣も持ち合わせている。

リーピチープは幼少時に、“Where the waves grow sweet, Doubt not, Reepicheep, There is the utter East.” (VDT p. 228) 「『波の味があまくなる時、まちがいないわ、リーピチープ、東のはてがあるのよ』」と木の精ドリアドから聞いていた。〈朝びらき丸〉が武器を持った海の人々に出くわしたとき、リーピチープは自ら海に飛び込む。それは海の人々と闘うためではなく、海水の味を確かめるためであった。果たして、水の味は予言どおり甘く、船が東の海の果てのさらに果てに到達しつつあることを確かめた。

また、自身の目的地付近までやってきたことを確信したリーピチープは、単独で小船に乗ってさらに東にあるといわれるアスランの国を目指す。そこまで行って戻ってきた者はおらず、これが恐らくはリーピチープにとってナルニア国の仲間たちとの今生の別れとなるが、幼少時からの夢に向かってその別れも甘んじて受け入れ、すべてを投げ打って船出する。このように、彼は自分の正義や信念に基づき、危険や孤独を顧みず行動する勇氣を持ち合わせている。

これまで見てきた通り、リーピチープはルイスの提言する騎士道精神の体現者である。時折無鉄砲な行動に出、正論をつき過ぎて煙たがれることはあるものの、ナルニア国の皆から愛され尊敬される NHC である。

ルイスの望む騎士の理想像ともいえるリーピチープには、〈内なる敵〉は見当たらず、むしろ周囲の登場人物や読者である少年少女がリーピチープの言動によって自身の内なる敵に気づかされるような存在である。

4.7 NHC 以外の〈内なる敵〉

VDT は、NHC だけではなく人間の心の中にある〈内なる敵〉も登場する。例えば、カスピアン王とエドモンドは、第8章であらゆるものを純金に変える泉を巡って諍いを起こす。純金に変える泉は、人間の醜い独占欲を浮き彫りにする鏡でもあったのだ。また、ルーシィは、コリアキンの館の魔法の書で〈のうなし族〉の為の呪文を探すうち、2つの魔法を自

²³ Lewis, C.S. *Prince Caspian*, New York: HarperCollins, 1994, p. 209

分の欲のために使ってしまう。ひとつは周囲が自分を褒め称え、自尊心を満足させる魔法。もうひとつは学友の会話を盗み聞きする魔法であった。純金の泉、魔法の書、いずれもアスランの登場でそれ以上深入りすることなく、〈内なる敵〉を垣間見る程度で終わったが、読者にとっては特に〈良い子〉の代表格であるルーシィですら〈内なる敵〉に負けそうになるのは衝撃的であるといえる。

さらに、〈朝びらき丸〉の航海中、船は漆黒の闇に襲われる。この闇は、それぞれが見たくないものが見えてしまうというものであった。それぞれの見たくないものについては明らかにされていないが、それこそが彼らの〈内なる敵〉に違いない。

5. おわりに

VDT には一貫した敵役が出てこないのはこれまで見てきた通りである。冒頭、ペベンシー兄妹の敵役となると思われたユースティスは結局全 16 章の前半である第 7 章で改心している。〈のうなし族〉とコリアキンのエピソードは 2 章分、海蛇と純金の泉に至っては 2 つのエピソードが 1 章分にまとめられている²⁴。航海で起こった、大なり小なり様々な出来事を記録した物語というイメージである。

しかし、ルイスは一貫した敵、すなわち人間・NHC に限らず自身に内在する〈内なる敵〉の存在をこの物語で読者である少年少女に示そうと試みたのではないだろうか。それはルイス自身が少年期から家族に対する喪失感、宗教に対する懐疑心、そして厭世観など多様な葛藤を抱えていたからこそ、それらを克服する大切さを読者に提示しているのである。

(Received: September 30, 2015)

(Issued in internet Edition: November 1, 2015)

²⁴ VDT は HarperCollins 版 (1994 年) で 1 章が 16 ページ前後である。